

令和 6 年度 徳島県立博物館・徳島県立鳥居龍蔵記念博物館協議会

【日時】

令和 6 年 9 月 2 4 日（火）午前 1 0 時から正午まで

【場所】

徳島県立博物館 講座室

【出席議員】（5 0 音順、敬称略）

安倍 久恵（フリーアナウンサー、佐古絆文化協会事務局）〈副会長〉

生駒 佳也（徳島県立阿南光高等学教諭）

瀬戸 恵深（株式会社エフエムびざん放送部ディレクター）

徳原 香（株式会社あわわ めぐる、事業部編集長）

西 記代子（四国大学文学部講師）

福井 春菜（徳島県立佐那河内村いきものふれあいの里ネイチャーセンター 自然観察指導員）

町田 哲（鳴門教育大学大学院学校教育研究科教授）〈会長〉

宮岡 真央子（福岡大学人文学部教授）

森脇 佳代子（阿南市立羽ノ浦小学校 PTA）

森脇 崇文（徳島県立徳島城博物館主査・学芸員）

1 開会

2 館長挨拶

3 委員紹介

4 議事

（1）令和 5 年度事業実施状況（博物館）

（2）令和 6 年度予算及び事業概要について（博物館）

（3）令和 5 年度事業実施状況（鳥居龍蔵記念博物館）

（4）令和 6 年度予算及び事業概要について（鳥居龍蔵記念博物館）

（5）その他

5 閉会

（1）令和 5 年度事業実施状況について（博物館）

（2）令和 6 年度予算及び事業概要について（博物館）

（5）その他 （質疑応答）

委 員	徳島県立博物館（以下、博物館とする）と学校の連携に関して、徳島県立城南高等学校（以下、城南高校とする）と徳島市立高等学校（以下、市立高校とする）を訪問した。城南高校は、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）に採択されており、生徒の研究意欲の向上を目的として、1年生を対象に、研究への入門講座を実施している。博物館の学芸員の当該講座での講義は、生徒・教員ともに好評であったと聞いている。また、ICT を活用した教育支援プログラムである Classi に博物館からの情報を掲載したところ、好評で実際に興味を持った生徒が博物館に問い合わせた例もあるようだ。 さらに、市立高校では、博物館にて令和 6 年度企画展「海からどんぶらこー知られざる漂着物の世界ー」（以下「海からどんぶらこ」展とする）を観覧し、大変好評であったようだが、そこから次の活動へは発展していない。現在の高校生が日々得ている情報量はきわめて多く、Classi でのデジタル情報の発信にせよ、従来の紙媒体での情報発信にせよ、各生徒へどのように博物館の情報を効率的に届けるのかが今後の課題である。 昨今、高等学校の教育現場では、「総合的な学習（探究）の時間」や「課題研究」が取り入れられているが、教員は高等学校在学中にこれらを経験したことの少ない世代であり、どのように指導すればよいか戸惑いがみられる。博物館に期待するのは、このような課題の解決である。博物館に収蔵されている資料の活用や、学芸員が有する調査・研究に関する経験や知識は、このような課題を抱える教員の助けになるだろう。高等学校での教育は博物館との連携や活用を必要としている。 今までは高等学校の教育現場における研究・探究活動の実施を大学に期待していたが、これからは博物館にその役割を期待したい。
事務局	委員の話にもあったように、市立高校の生徒に「海からどんぶらこ」展を観覧いただき、展示解説や当該展示にご協力いただいた漂着物学会員を紹介する機会があった。その際、教員から「研究のネタを探すためにも、当該展示に関して着目するポイントを教えてほしい」との要望があった。先のご意見にもあったとおり、その後に学芸員の手を離れてしまうと、高等学校の教員と生徒のみで研究を進めるのは難しい部分があると感じた。 城南高校の生徒からは、「総合的な学習（探究）の時間」の中での研究テーマとして、魚の消化管内容物のマイクロプラスチックについての問い合わせがあった。当館学芸員が研究の初期段階から対応し、最終的には京都大学の教員にも問い合わせ、消化管内容物に含まれる破片がプラスチックかどうかを分析した。そして、研究結果をポスターにまとめ、「海からどんぶらこ」展に展示コーナーを設けた。

	このように、一部の生徒は博物館と密に連携し、研究を実施しているが、現状では同様の連携ができる生徒は限られ、そのような連携をしていくには教員の協力も重要である。今後、高等学校との連携に関して、さらに発展させていくための手段を検討していく。SNS の発信についても、その内容や頻度等を模索している。チラシ等の紙媒体も含む情報提供方法について、どのような方法が効果的なのか検討していく。
委 員	令和 5 年 7 月 28 日に開催された「教員のための博物館の日 in 徳島」に関して、どれくらいの人数の教員が参加したのかを知りたい。
委 員	「教員のための博物館の日 in 徳島」は、出前授業の依頼等のアウトリーチ活動につながっているだろうか。専門的な知識を持った博物館の学芸員が講義をする出前授業は学校教員にとっても有益で、生徒にとっても印象に残るはずである。多くの学校で出前授業を積極的に行っていくことは様々な面で大きな効果があると思われるが、出前授業をうまく使えば、博物館に興味を持つ子どもが増えるのではないか。博物館と学校教育の現場の双方に無理のない形で関係性を構築できればよい。
事務局	「教員のための博物館の日 in 徳島」は 10 年ほど継続しており、参加教員数は例年 20 人ほどである。当日は、収蔵庫等の博物館の裏側を視察いただくとともに、博物館実習室で各学芸員がブースを設け、教育現場に貸出可能な資料の紹介や講義での話題について解説している。教員と学芸員が密にコミュニケーションを取ることができ、参加者からは好評である。このような活動を通して、学芸員と教員の継続的な関係性が構築できればよいが、現状ではそのような例は多くない。今後も地道な活動を継続し、教員との関係性構築を少しでも広げていく必要があると考えている。
委 員	令和 6 年度企画展「トクシマ恐竜展 2024」では、SNS で当該展示に関する投稿を発信したことは興味を引くという点で良い試みだと感じる。常設展示も含め、展示等を深く掘り下げて発信することも重要だが、SNS では浅く広く発信できる強みがある。このような SNS ならではの強みを活かした情報発信も有効だろう。
委 員	別の委員から博物館から発信した情報が高校生に届いていないのではとの意見があったが、『徳島県立博物館年報第 33 号（令和 5 年度）』を見ると、SNS による情報発信を始めた昨年度の常設展示の観覧者数が増加してい

	る。令和4年度よりも令和5年度で高校生、大学生の常設展観覧者数が増加しているが、これはSNSによる情報発信の効果と言えるのか。
事務局	高校生による当館の常設展示室の観覧は、令和4年度に比べると令和5年度ではわずかに増えている。しかし、その要因は、SNSの発信の効果によるものとは断定できない。常設展示室を観覧する高校生の人数は、遠足を除くと年間200～300人ほどである。博物館の展示等に興味がある高校生は自発的に情報を収集し、来館していると思われる。 例えば、「トクシマ恐竜展2024」については、観覧者に占める高校生の割合は低い。このような傾向は、当館での過去の恐竜に関係する企画展でも同様である。「トクシマ恐竜展2024」では徳島新聞社と共同して、徳島新聞での情報発信を複数回行った。また、SNSでも多く情報を発信した。SNSに関しては、香川県、徳島県、兵庫県の淡路島及び神戸市を対象に、「トクシマ恐竜展2024」に関係する情報の閲覧数等を調査した。その結果によると、発信した情報は、高校生も含め、少なくない人数に閲覧されているようである。しかし、SNSで情報を閲覧しても、それが当該企画展の観覧にまでつながったのは想定していたよりも少なかったというのが実情である。当該企画展の開催期間中に展示解説をした際、高校生から展示内容に加え、恐竜や化石の研究やそれに関する将来の進路に関する質問も多かった。このような質問は普及行事でもしばしば受けている。単純に観覧者数に占める高校生の割合にこだわるよりも、興味を持って来館してくれる高校生への対応も重視する必要があると考えている。
委員	令和5年度企画展「朱を求めて－若杉山辰砂採掘遺跡からみる徳島の弥生時代－」で扱った若杉山辰砂採掘遺跡は国の史跡にもなっており、徳島県内でも知名度は高くなってきている。今後のその研究成果について、継続的に発表してもらえると興味関心のある県民に喜ばれると思う。 「かがやく生きもの－光をまとった生きものの不思議な世界－」（以下「かがやく生きもの」展とする）では、LEDライトや紫外線ライトのスイッチを操作して、展示物を光らせるという仕掛けがあり、子どもたち楽しんでいく様子が見受けられた。展示物を単に鑑賞するのみではなく、自分でライトのスイッチを操作して展示物の変化を体感するという仕組みが鑑賞者に感動をもたらしていた。さらに、展示ケースの前に多数の踏み台が設置されており、小さな子どもでも、大人と同じ目線で展示ケース内の資料を見ることができ、よい配慮であると感じた。「トクシマ恐竜展2024」でも、恐竜の化石に触れることができるコーナーや恐竜のロボットに乗って写真撮影がで

	きるコーナーがあり、体験の機会が確保されていた。企画展に限らず、触れられる、あるいは音を鳴らせるような展示は、常設展でも取り入れられており、子どもにとっては効果的であると感じた。 また、「トクシマ恐竜展 2024」に関しては、新聞での発信も活発で、展示の見所や来場者が一万人を突破したこと等の情報も掲載され、県民の来場意欲を刺激できたのではないだろうか。さらに当該展示の中で、福井県立恐竜博物館をはじめ、多くの関係機関と協力関係を築きつつ、発掘や研究を進めていることがわかった。
事務局	「かがやく生きもの」展では、未就学や小学校低学年の児童がライトのスイッチを操作して、展示物を興味深く見ていた。このような展示は児童に人気が高かったため、「海からどんぶらこ」展でも、一部で取り入れた。この例のように、年齢に応じた展示手法について工夫していく必要があると感じている。常設展でもハンズオン等の展示がすでにあるが、より効果的な展示手法について検討していきたい。 博物館に訪日外国人観光客が来館する機会は不定期で、その動向について情報を収集すると共に、どの程度、訪日外国人観光客に合わせた展示等を展開するかは、長期的な目線で検討していく必要があると考えている。 若杉山辰砂採掘遺跡については、注目が集まっており、関係する写真や資料の貸し出しの問い合わせも増えている。また、阿南市との共同で辰砂採掘遺跡探検も実施している。展示に加え、他の機関等とも協力しつつ、発信をしていきたい。
委員	資料の収蔵スペースが逼迫しているとのことで、具体的にどのような方策を検討しているのか。また、博物館が資料の燻蒸に使用している燻蒸ガス（エキヒューム）の生産が中止になるとのことで、今後の資料燻蒸に関しても伺いたい。
事務局	収蔵スペースに関する課題について、まずは、他館の視察や情報収集を行っており、今後の方針について検討している段階である。様々な視点から、この課題について検討を進めていく。また、博物館が徳島県立文化の森総合公園内にある以上、博物館だけでなく、当該公園内にある他の館とも連携しながら検討を進めていく必要がある。 現在、博物館で使用している燻蒸ガス（エキヒューム）は令和 6 年度で製造が終了するため、令和 7 年度より使用できなくなると思われる。今後は、総合的有害生物管理（IPM）を取り入れていくことも検討している。また、

	今までは真菌（カビ）に効果がある燻蒸ガスにて、定期的に燻蒸庫と収蔵庫にて資料を燻蒸していたが、収蔵庫内での真菌検査を令和 7 年度から継続して実施していくことも検討している。
委 員	知人から「中高生が博物館を介して研究する楽しさを知り、自分自身で学ぶことのできる機会・環境を設けてほしい」との意見をいただいている。私自身も、10 年前に子どもと共に博物館のボランティアをしていたが、高校生になった息子が、当時ボランティア活動をやってよかったと言っている。幼少期から博物館に出入りして、色々なことに主体的に取り組むという経験は、短期的な効果はなくとも長期的には効果があることもあると実感した。ボランティア活動として、「文化の森ウィンターフェスティバル」で展示解説を実施したとのことだが、中高生にとってとてもよい経験になると思うので、今後も続けてほしい。未就学児が学芸員とキッズスペースでの遊びを通じて学ぶ「こどもゆさん」についても、小さい頃から学びへの抵抗をなくし、知ることの楽しさを感じることでできる機会だと思うので、このような活動を継続して行ってほしい。
事務局	現在、博物館のボランティアには小中高生や大学生も参加いただいております、イベントでの解説等、自発的に知識を得てそれを伝える体験をしてもらえる場として博物館を活用していただけることも発信していきたい。 これまでは、ボランティア活動として各年度で 1～2 回程度のイベントを企画、博物館常設展示室等で行ってきたが、ボランティアの方に展示解説をしてもらう等、今後の方向性を模索している。また、常設展示室でのイベントに関するボランティアだけではなく、資料収集保存等の学芸員の業務の補助をしていただくボランティアについても導入を検討しており、実際に、学芸員資格取得を目指している大学生とともにボランティアとして常設展示室の環境測定等を行っている。学芸員の業務量が増大していることから、学芸員の業務をボランティアとして補助してもらいつつ、ボランティアの方々は自身の興味関心のあることを専門的に行うことができるというような、双方にとって有益な関係性を構築していきたいと考えている。
委 員	授乳室を利用した際に、お湯を出す機械の使い方がわからなかった。設備は整っているにも関わらず、使い方の説明が不十分な部分があった。また、SNS では展示に関する情報発信を積極的に行っているが、施設の設備に関する情報は少ない。博物館には快適な環境が整っているので、情報発信をしてほしい。

事務局	授乳室について使い方を掲示する等、徳島県立二十一世紀館と相談して改善していきたい。また、博物館で利用できる設備について、文化の森各館と連携して SNS 等で発信していきたい。
-----	---

(3) 令和 5 年度事業実施状況について（鳥居龍蔵記念博物館）

(4) 令和 6 年度予算及び事業概要について（鳥居龍蔵記念博物館）（質疑応答）

委員	鳥居龍蔵記念博物館（以下、鳥居博とする）発行しているニュースレターやトピックコーナーの展示等を拝見し、実際に鳥居博が扱っている専門領域の広さを実感した。様々な調査地域や年代を対象に、鳥居龍蔵の家族等も含めて多角的に研究し、それに基づいて展示することは、素晴らしいことだと感じる。
----	---

令和 5 年度企画展「台湾世界を行く 鳥居龍蔵の見た海・山・ひと・ムラ」を観覧した際、SNS で当該企画展について周知したところ、台湾の研究者たちも興味をもち、来館した方もいたと聞いている。海外にまで鳥居博への注目の輪は確実に広がっていると感じた。これらの鳥居博の活動を、県内の高校生や県民の方々の興味関心にどのようにつなげていくのが課題である。高校生にとって、地域の学術情報を蓄積し、発信をしている場が身近にあり、それらを実感しながら勉強できる環境は重要であると感じる。そのことを念頭に鳥居博で活動を進めてほしい。

事務局	次世代を担う中・高生等の関心をどのように引きつけていくかは、鳥居博の課題の一つとして認識している。SNS の活用や、学校の教員へどのように情報を発信していくかも検討していく必要がある。また、鳥居博に勤務する学芸員の世代交代の時期に差し掛かっており、これまで構築してきた人的ネットワークも引き継いでいかなければならない。鳥居龍蔵が海外で研究活動をしていたことが、中・高生の研究への興味関心を引くのではと期待しており、このような視点から情報発信を続けていこうと考えている。
-----	--

委員	今後の台湾との交流計画はどうなっているか。
----	-----------------------

事務局	令和6年度は、国立台湾史前文化博物館の研究者が来日し、鳥居博の資料調査を行う予定である。国立台湾史前文化博物館では鳥居龍蔵に関する企画展の開催を考えており、それを踏まえた調査である。 また、東京大学総合研究博物館での鳥居龍蔵関連の資料調査についても、国立台湾史前文化博物館の研究者と協同で実施できればと考えている。
委員	鳥居龍蔵は、徳島県における高校生の教材としても魅力的である。鳥居博が開催している「鳥居龍蔵記念 徳島歴史文化フォーラム」で発表をした生徒が、現在、大学院で文化人類学を専攻しており、高校生の時に当該フォーラムで鳥居龍蔵について調べて発表したことが進学の一きっかけの一つとなったようである。鳥居龍蔵は研究対象として魅力的であり、高校生の興味関心を引きつけられる。その魅力を学校教育現場にうまく発信できればよい。 令和6年度企画展で鳥居きみ子にスポットライトがあたることが非常に楽しみである。鳥居龍蔵の研究や生涯だけではなく、その妻である鳥居きみ子に着目して紹介することで、鳥居博の活動に興味を持つ人もいるかもしれない。
事務局	令和6年度企画展では、まさにそのような視点を意識して企画した。準備を進めているので、楽しみにしていただきたいと思う。
委員	鳥居龍蔵について、徳島県外からの注目度が高いと感じる。県外の方々が注目していることを県民が知ること、県民の鳥居龍蔵への興味が高まることも期待できる。県外に向けてニュースレターを送付すれば、効果があるのではないだろうか。
事務局	ニュースレターを県外に向けて送付するというご提案をいただいたことについては是非検討していきたい。
委員	学校教員に話を伺ったところ、中学校や高等学校の教員に鳥居龍蔵について知ってもらいきっかけを作ることが重要ではないかとのことであった。例えば、鳥居龍蔵の生涯を短いアニメーションにして紹介したら興味を引きつけることができ、鳥居龍蔵を知ってもらいきっかけになるのではないか。
事務局	中学・高校の教員に対しては、鳥居龍蔵の資料を使ってどのような教育活動ができるのかを具体的に伝えることで興味を持ってもらう必要があると考えている。アニメーションについては、イラストを使って簡単な動画を作成する等、予算や割ける労力を加味しつつ、実現可能な範囲で実施していければと考えている。